

近畿大学原子炉60周年記念に向けて

講師 堀口哲男

近畿大学原子炉が設置から60周年を迎えたことは大変誇らしいことだと思います。私が近畿大学原子炉とかわりをもったのは平成元年のことでした。学生として近畿大学に入学し、当時の所長の柴田先生と知り合い、学生の身分でありながら中学・高校の理科教員対象の研修会の手伝いわせてもらったことが原子炉との付き合いの始まりです。学生の時は、学生実験でもお世話になりました。その後平成7年から原子力研究所の教員となり、原子炉とかわっていくことになるのですが、入所当時一番印象に残っているのが研修会です。当時の研修会は現在の研修会と内容が異なっているところが多く、原研職員の意気込みも伝わってくると思います。現在では当時の研修会の様子を知っている教職員は橋本先生、稲垣さんしか残っていません。そこで、現在の教職員の方々にも知ってもらいたいとの思いを込め当時の研修会について述べていこうと思います。

当時の研修会は非常に密度が高く、2泊3日のスケジュールで実施していました。2泊3日だと大したことはないように思われるかもしれませんが、朝一から夜中までめいっぱい詰め込んだ研修会です。まず初日は原子炉の見学、講義から始まって臨界近接実験が行われます。臨界近接実験一つとっても臨界に近傍では、原子炉燃料要素を1体追加するわけではなく、燃料板を1枚ずつ装荷するような今の学生実験でもしないような手の込んだ内容でした。1日目の実習を終えると研修生と参加教員全員で食事となります。全員参加です。食事は学内の食堂でしたが、食事は討論会も兼ねています。1～2時間の食事のあとはゲストハウスに向かいます。当時のゲストハウスでは和室という懇親できる場がありました。そこに前もって用意したお酒、おつまみを取りながらの討論が続きます。お酒、おつまみは原研の事務の方々（当時は瀧口さんが中心でした。ご苦労様です。）に事前に用意してもらいました。討論は日が変わるころまで続きます。新人であった私はお酒を注いで回ったりしていたのを懐かしく思い出します。そして何より強い印象が残っているのは当時の所長、研修生が、お酒が入ったからかもしれませんが、夜中まで熱い議論を戦わせていたことです。

2日目も原子炉熱出力の測定、放射化分析等の講義実習を行い食事、討論会と続きます。現在の研修会と比べるとかなりハードスケジュールであり、研修生からも大阪観光もできないとの苦情もあり徐々に現在のような研修会の形態になっていきました。研修会は近畿大学原子炉の一つの社会貢献活動であると思います。研修会に対する要望も時代により変わるとは思いますが今後も継続していけたらと思います。

また、現在は諸事情により開催されていませんが、原子力展も大変思いで深いイベントです。この原子力展により周辺住民と触れ合うことができたため、JOCの臨界事故、福島第一原子力発電所の事故等の原子力に対して向かい風があった時でも周辺住民からの原子力研究所に対する反発もなかったものと考えます。

今日まで、原子力研究所が大きなトラブルもなく続けてこられたのは、確実に管理業務を行ってきたからであるのは言うまでもありませんが、研修会、原子力展等の社会貢献活動によることも大きいと感じています。私は原子炉の見学、紹介等で、この原子炉はビンテージ物の非常に貴重な原子炉だと説明しています。貴重で価値のあり100年以上昔のものはアンティークと呼ぶそうです。今後、この原子炉をアンティークと呼べるように100年以上維持していきたいと考えています。